

## 夜霧のブルース

1

青い夜霧に 灯影が紅い

どうせおいらは ひとり者

夢の四馬路すまろか 虹口ほんきゆうの街か

ああ、波の音にも血が騒ぐ

男盛りという言葉があるが、この歌には筋骨体力充実

し、弁も立つ一端いっぽうの男のイメージがある。周りから一目

も二目も置かれた存在で、クラブに入れば上席に案内される、そんな三十代から四十代の男を彷彿して歌うのが

よい。「夜霧のブルース」は男の真骨頂を描くから詩にも曲にも歴史を踏まえて隆々たる響きがある。

歌い手はだから、表情にもコスチュームにも気を付けてもらいたい。

上下、アメリカンカットのスーツに身を固め、臙脂のネクタイをしめ、やや鰐長のソフト帽にバーバリーのト

レンチコートを着込む。できたら靴もタイもバーバリ調で揃えたい。

ダムのカラオケではモノクロ・フィルムで歌手のディック・ミネが少々お年を召されてこのスタイルで出て来て、やくざ者相手に拳の立ち回りを演じる。

時是一九三〇年代、いやもう敗色濃い四四年ごろかも。場所は上海。男は日本人街の虹口に住むか。見るからに諜報員の無頼漢風。胸のふくらみの中身は見なくても判る。南部式自動拳銃だ、大型の、ルガー・タイプの。100m先の狙撃相手の心臓を的確にブチ抜ける。ワルサーPPKというより、p38の威力だ。そいつを胸ポケットに、今しも群りよる荒くれ男共と乱闘。カラオケのバックは横浜の赤レンガ倉庫だから、ちょっと興醒めだが、ディック・ミネはきびきび動いて、さまになっている。る。

敵はいつソ連銃を使うか。かまうものか。殺されたって…。どうせ俺はおに日本を見棄て、自分の運命でさえ棄てて来た風来坊。死んでも悲しむ奴なんかない。

すてばちな人生をこの歌のセリフはよく捉えている。

歌づくりの目から言うと、「状況づくり」が上手い。

かかってくるなら、かかって来い！ の心境が歌全体に漲っている。だからダンディで胸を張って腹から低音を出せる、腹筋に力を入れて、これぞ勝ち戦の帝国日本のダンディズムだという調子で詩も曲もまとめたのであろう、戦争末期に。

だが、この作品がリリースしたのは戦後である。

戦争なんか懲り懲りだ、二度と御免だの風潮濃い戦後間もない頃である。敗残で復員し、垢だらけの敗残兵は

3

素寒貧ではらぺこ。戦後の戦争否定ムードでいい加減鬱屈していた男共はこの歌で心を酔わせた。ガッツある男の復活だ。だが、映画ではそうは描かれていない。強さが漲る歌詞とは裏腹に悔悟と哀愁が滲み出ている物語になっている。顔で笑って心で泣いてというダンディズムさえ窺えないが、歌そのものは一匹狼を讃える歌だから泣ける。

昭和三〇年、ある馬鹿な政治家が、「日本はもう戦後で

はない」と言い放って顰蹙を買ったが、ディックは構うことはねえ、新橋で焼け残ったキャバレー「ショウボート」のボロビルでこれを歌い客筋は上々、昭和三四年、大学で上京した筆者もこのショウポートで歌手のバイトをしていたから、ディックさんの前座としんがりをやった。新橋の夜も更ける頃、僕が登場すると、照明がぐうんと暗くなる。ホールの中央ではべったりくつつきあった男女が僕の「夜霧のブルース」で踊ってくれる。

僕はこの曲や「ダンスパーティーの夜」（これも名曲！）を歌うと、みなさん、抱き合って夜の深けるのも忘れて踊ってくれた。昔の光今いずこである。

この頹廃ムードこそ、この歌の持ち味だろう。

だから現代史を遡る心境でユーチューブで聴いてくれ。歌手ディック・ミネは口癖のように言っていた、「俺は生涯、不良だ」実はディックさん、真面目な立教大学出身の男だけれども、そう言って物語の主人公そのものに成りきる。それで生き抜いたから偉い。

ではそのムードを心に思い描きながら、ユーチューブ

で何回も聴いて、覚えちゃってくれ。自分が作詞するときは、一行でも一句でも真似するんじゃないぞ、だがこの名曲が好きになれば、君にもいい歌が書けるはずだ。

## 2

可愛いあの娘こが 夜霧の中へ  
投げた涙の リラの花

何も言わぬが 笑ってみせる

あゝこれが男と 言うものさ

ここで、一番と二番、言葉を一文字、一文字、指折り数えて読んでみよう。七、七、五、七、七、五。つまり典型的な七五調なのである。

二一世紀になっても、この調子で作った歌詞はひばりちゃんとか八代亜紀とか、そういう大歌手にしか向かない。大型歌手には定型詩が向く。逆に言えばそんなムードをもたない歌手や若い歌手には七五調の歌は不似合い

だ。

さて、二番の内容だが、この風来坊にも好きな娘がいた。彼女は中国娘で、クーにゃんどうせこの恋は実らない、あなたは日本人。いずれはジャパンに帰るんだ、私を見棄てて。と、折角やった花束を涙ぐんで路上に投げる。日本の帝国軍人やスパイは中国軍に追われて、上海から放り出される。だから私とは添い遂げられない宿命じゃないのさ、と、愛の花束を路上に投げる。やった自分はそれを黙って見ているほかない。

その時、男はしみじみと判るのだ、自分には落ち着いて暮らせる場所がないと。

この歌はダンディな強がり男の愁嘆場を描写しているとも言える。中国戦線でも南方戦線でも、日本兵は現地の住民には悪いことをせず、優しく情愛を示す傾向が強かった。だから現地の娘とは何万という恋愛沙汰が起ったのである。戦争が終わったら式を挙げよう…そんな夢はひとたび敵味方に分かれてしまえばそれっきり。中国娘もそれを知っているから、愛の象徴でもある花束を

涙と共に投げ返すのである。

3

でもダンスホールへ行けば、ダンサーが稼業の女性はいつも通り出勤している。長いピンクのドレス姿で壁を背に立っている。見つけて手を取り、ホールの中央まで連れて行き、踊り始める…それが歌の三番の内容である。

花のホールで 踊っちゃいても

春を持たない エトランゼ

男同士の相合傘で

あゝ嵐呼ぶよな 夜が更ける

この四行、余程の上海通つうでないと判らないから説明を添えると、帝国海軍陸戦隊の本部は日本人街を警護する意味から虹口ほんきゆうとフランス人居留区との中間ぐらいに位置していたから、この白タイル貼りの丸っこい角の建物と

虹口との中間ぐらいの道路端に「ブルーバード」というダンスホールがあつて、そこに働くダンサーたちは中国人のクーニャンで客はむろん海軍の将校だった。歌の主人公は一匹狼のスパイ。どこで中国側の諜報員の目が光っているかも。だからダンスホールがラストダンスを終えると、一緒にホテルに行くなど、危険すぎてやらない。クーニャンも日本人と中国軍の間で二重スパイをやっていることが多い。だから愛の花束を貰って素直にほほ笑むなどしては殺される。それもあつて、彼女も相手に泣いて投げ棄てる。中国軍の第五列（逆スパイ）の目に付いて二人の関係がバレてはおしまいだ。

だから、クーニャンはブーケを放り投げ、ホールでまた会つても抱かれて踊るだけ。

主人公は日本人の仲間と一緒に出る。外は雨だ、あいあいがさ相合傘で宵の街路をあるく。と、きっと第五列の奴らが、後を付けてくる。嵐を呼ぶぞ、今夜は。俺たちは今夜あたり、消されるのだ…

バン、バン！



今夜も軍用拳銃の撃ち合いか。

自分はこの上海では徹底してよそ者でしかなく、今は  
エトランゼ  
冬だが、春までここにおれるかどうかもう危うい。俺は結局この上海で無名のまま消される運命なのだ。

男は、いよいよ、今夜でこの命も終わ리かと思いつつ雨の舗道を歩くのである。

今もこの歌はカラオケでよく歌われる。が、たいていの諸君は歌の真意をここまでは読み取れてはおるまい。それでいいのだ、歌は迫りくる恐怖を描きながら、エキゾチックな上海を舞台に、一人の孤独な男の命を、かつこいいバック・ミュージックで飾って終わるのである。

（濱野成秋）